

貧困が子どものメンタリティ に与える影響

筑紫女学園大学
大西 良

プロフィール

所属：筑紫女学園大学 人間科学部人間科学科
社会福祉士、精神保健福祉士など福祉専門職の
養成教育に携わっている。

専門分野：児童福祉、精神保健福祉

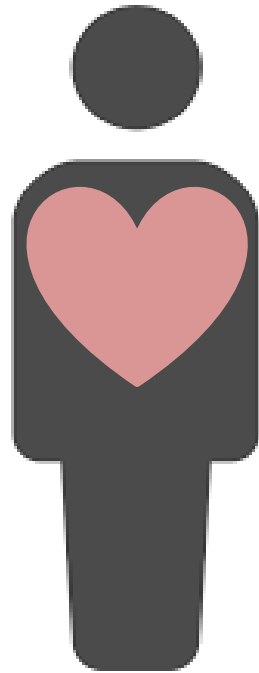
臨床経験：公立小・中学校のスクールカウンセラー

地域活動：大学生と共に「子ども食堂」や「学習支援」を
実施して、福祉的課題を抱える子どもたちの
支援を行っている。

貧困が子どものメンタリティに 与える影響

メンタリティ:

なかなか表出されない人の内面的な部分



しっかり見ようとしないと見落としてしまう問題

エピソード

中学1年の男子(Aくん)。

Aくんは、小さい頃からサッカーが大好きで、中学に入ったらサッカー部に入部することを望んでいた。ある日、Aくんはこっそりと次のことを話してくれた。

『僕はサッカーが好きだし、友達もみんなサッカー部に入っているから、僕も入部したい。でも僕には、スパイクや練習着を買うお金がない。親には絶対に相談できない。だって(親が)すごく困っちゃうから。だから僕はサッカーをあきらめます。』

エピソード

中学3年の女子(Bさん)。

Bさんは、欠席や遅刻もなく、学校が大好きで毎日勉強と部活動に励む明るい性格の子であった。

ある日、Bさんは涙ながらに次のことを語ってくれた。

『先生、私の家は貧乏なんです。お金がありません。きょうだいも多いから、卒業したら私が働かないと下の子たちを養っていくことができません。お母さんもそれ(働くこと)を望んでいます。ですから本当は高校に行きたいけど、あきらめます。』

貧困は主観的な体験であり、個人が感じる質的なものである。だからと言って、「個人的な体験」で済ませてよいのでしょうか。

この子たちは、「あきらめる」という経験をどのように受け止めているのでしょうか。

そして貧困体験が、子どものメンタリティの形成にどのような影響をもたらすのでしょうか。



子ども期の貧困問題の核心

子ども期の特徴

乳幼児期は、親子関係を基盤に愛着や基本的信頼感を形成し、食事や睡眠などの生活習慣の基盤を築いていく時期である。また就学期ともなれば、子どもは学校という場で多くの時間を過ごし、教師や友人などとコミュニケーションを通じて社会関係を広げていく。そして、その社会関係を基盤にしながら様々な生活体験や文化的な営みを経験し、より豊かな人格を形成していく。

子ども期は、

家族に依存することが多い(強い)時期である。

豊かな人間性と社会性を育み、アイデンティティを形成する大切な時期である。

貧困による“4つのない”

お金がない（経済的貧困）

チャンスがない（機会の貧困）

つながりがない（関係性の貧困）

自信を持ってない（自己肯定感の低さ）

貧困の“長さ”と“深さ”

貧困に晒される期間が長いと・・・

お金がない チャンスや体験の喪失

それが長く続くと(慢性化すると)

エネルギーが枯渇する あきらめ

努力しても無駄 「あきらめ」が当たり前になる

「ムリムリ」「私にやれる訳がない」などが口癖になる

自ら低い「限界設定」をする 自己肯定感の低下

貧困の“長さ”と“深さ”

貧困による“心の傷”が深いと・・・

「あきらめる」経験

その経験が“心の傷”を生む

心に刻み込まれた傷

記憶(エピソード)

消したくても消えない

“心の傷”を抱えて生きる

トラウマとなって、様々な身体的、精神的、社会的な問題
となって表出される(心の叫び、子どものSOS)

具体的には(臨床経験から)

- ・「怒り」をコントロールできず、情緒的な不安定さを呈する子ども
- ・将来や未来に対して希望を抱けず何事にも無気力である子ども
- ・生活上の葛藤を弱い者(年下の子、小動物など)に向けて“いじめ”として行動化する子ども
- ・リストカットや抜毛などの自傷行為として自身の心情を表現する子ども
- ・こころの寂しさを紛らわすために非行に走る子ども
などその表現や現れ方は様々である。

子ども期の貧困がもたらす影響

子ども期の貧困は、子どもたちが成長・発達しようとする力や生きる意欲を失わせ、多様な問題として表出される。 家庭の影響が大きい

子ども期の貧困は、子どもたちの“今(現在)”にも深く関与するが、「あきらめる」などの貧困体験に起因する心の傷は、子どもの“将来(未来)”にも大きな影響をもたらす。

貧困による生きづらさが蔓延する

現代社会において、

今、生活困窮家庭の子どもの学習支援と

並んで全国各地で広がっている取り組み。

それが、「**子ども食堂**」である。

子ども食堂の現状①



沖縄を除く九州7県に関しては、2016年11月時点で**117カ所**の子ども食堂が開設されており、子どもの参加人数は2200人にのぼる。**1年間で10倍以上**に増加していることが報告されている。

子ども食堂数(県別、2016年11月時点)

福岡 64 佐賀 4 長崎 10 熊本 16
大分 13 宮崎 5 鹿児島 5

子ども食堂の現状②

- | そもそも「子ども食堂」は、2012(平成24)年頃から都市圏を中心に、貧困家庭や孤食の子どもに食事を提供する活動として活発となった。
子どもの貧困対策としての意味合いが大
- | 最近では、地域の**すべての子どもや親(保護者)、シニア世代**などを対象とする食堂も増えている。
- | さらに**食堂という形を取らず、放課後の学習支援や自宅以外で過ごす場所(子どもの居場所)の中で食事を提供するところも多い。**

九州7県の子ども食堂調査 (西日本新聞社との共同分析)

N=82 (117カ所に実施)

【活動目的】 N=82 複数回答

1. 居場所（交流の場）づくり 77.0%
2. 食の提供（バランスの良い食事等） 42.9%
3. 地域づくり 36.3%
4. 孤食防止 33.0%
5. 貧困対策 14.3%

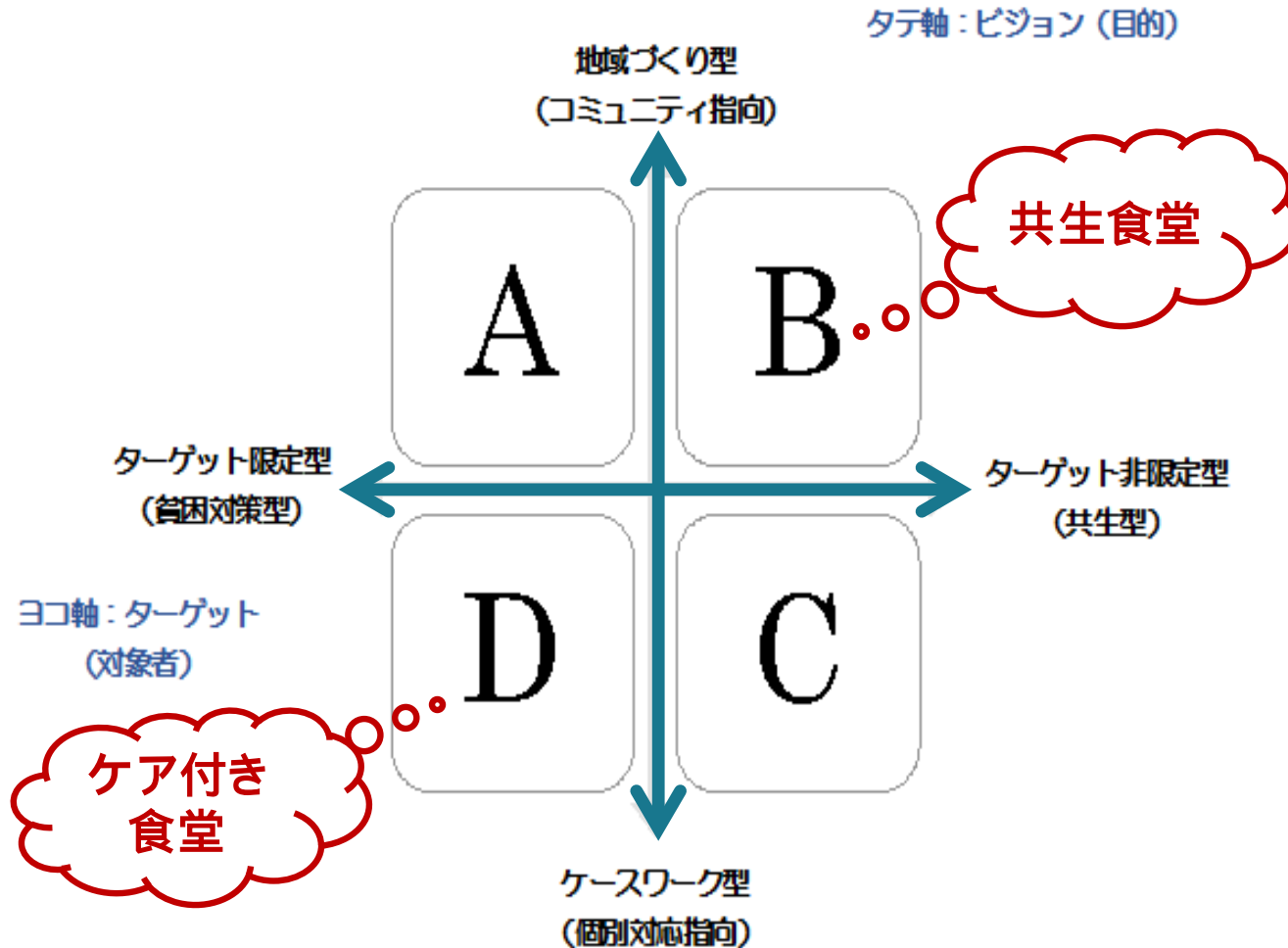
その他にも「親支援」「高齢者の生きがいづくり」
「障害者の支援」などの意見もあった。

九州7県の子ども食堂調査 (西日本新聞社との共同分析)

N=82(117カ所に実施)

- ①子ども食堂の開催頻度
平均月2回(週3日~2カ月に1回まで)
- ②スタッフの人数(常時・応援)
平均7.6人(常時) 平均9.8人(応援)
- ③子どもの平均参加人数
25.6人(最小:2人、最大:100人)
- ④参加費(子ども・大人)
子ども:無料が大多数(最大500円)
大人:平均251円(無料~最大500円)
- ⑤食材・高熱費等の調達方法
フードバンク:15団体
購入(自費・補助金):28団体
寄付:34団体
その他(店舗の食材、バザーの売り上げ):6団体

子ども食堂の類型①



出典：湯浅誠「こども食堂」の混乱、誤解、戸惑いを整理し、今後の展望を開く

<http://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20161016-00063123/> (2017年4月16日閲覧)

子ども食堂の類型②

	共生食堂	ケア付食堂
対象	誰でも	貧困家庭の子
ビジョン	交流促進	課題対応
大人の参加	大歓迎	限定的
運営形態	オープン	クローズ
その場に来る人	参加者	利用者
スタッフ・ボランティア	子どもも大人も、プロも素人も	基本は専門家(プロ)
運営上気をつけること	参加者同士がタテ、ヨコ、ナナメに縦横無尽につながっているか。	スタッフが子どもの様々なサインに気づけているか

出典：湯浅誠「こども食堂」の混乱、誤解、戸惑いを整理し、今後の展望を開く

<http://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20161016-00063123/>（2017年4月16日閲覧）

子ども食堂のイメージ図



「広がれ、子ども食堂の輪！全国ツアー 公式パンフレットより転載

学校・地
域の理解

場所
(調理場)

安全
(アレルギー・
事故・保険)

人
(ボランティア)

子ども
食堂

食材

連携
(行政等)

お金
(運営資金)

情報
(対象者)

子ども食堂の課題

- ①イメージの混乱が生じている
- ②事故対応の問題
(集団食中毒やアレルギー対策)
- ③連携の不十分さ
(子ども食堂間、学校、行政機関等)
- ④ブームで終わらせない
(継続するための具体的な手立て)

子ども食堂が持つチカラ・可能性

子どもを中心とした地域の居場所

多様な体験や人とのつながりを通して成長・発達できる
子ども自らがSOSのサインを出せる
子どもの権利が保障される
老若男女みんなの居場所になれる

子どもにやさしいまちづくりの実践

社会全体で子ども・子育てを考える
子ども食堂間や他機関・団体とのネットワークによって、
子どもを見守るセーフティネットが地域で作られる

ご清聴ありがとうございました。